



世界につながる教室⑧

遊びから世界を学ぶ

2019子どもワールドフェスティバル in 京都

世界の国々について子どもたちに知ってもらう機会を増やしたい——そう考える教員たちが集まり、20年間にわたり京都市で開催されてきた「子どもワールドフェスティバル」。今回は、その取り組みを紹介する。

4か国を体験しました！



韓国



アンニョンハセヨ！

講師：キム・ドンユンさん

韓国の紹介に選んだのは食。会社でも給食が出ること、キムチにもいろいろな種類があること、キムチ専用の冷蔵庫があることなどを話す。遊び体験はめんこに似たタックチ。自分の札で相手の札をひっくり返した子は、ガッツポーズで喜んでた。



トルコ



メルハバ！

講師：ヤルチェン・ビシルさん

日本からは遠い国、トルコ。まずは地図でトルコの位置を確認した後、お祭りやそのまま日本語にもなっているトルコ語、相手によって違う挨拶の仕方などを紹介し、子どもたちの心がかちつかむ。体験ではトルコの踊りやハンカチ落としのような遊びで盛り上がった。



中国



ニーハオ

講師：徐克彬(じょ・こくひん)さん

「中国の正式な国名を知っていますか？」という質問から始まり、人口や都市、徐さんの出身地の遼寧省、料理などについて紹介。後半は、羽子板の羽根をもっと大きくしたようなジェンズを蹴って遊んだ。初めて体験するジェンズに子どもたちは苦戦しながらも楽しんでた。



ベトナム



シンチャオ！

講師：ドー・ティ・ゴック・ヌーさん

地図と国旗、ヌーさんが着ている民族衣装アオザイ、学校の様子などでベトナムを紹介。取り上げた遊びはdua do(ドゥ・ドゥー)というゴム跳び。輪ゴムをつなげて作った長い縄を使い日本の大縄跳びのように飛ぶので、子どもたちはすぐにコツをつかんでいた。



楽しい体験を通して海外への興味を培ってほしい



京都市立高雄小学校 校長
国際教育・グローバルキッズ研究会 会長
坪内昌子(つばうち・まさこ)さん

小学1年生にもわかりやすくイベントの内容を説明する坪内さん。

楽しく異文化にふれる体験を

2019年12月7日、「子どもワールドフェスティバル」の会場となった京都市総合教育センターに、たくさんのお親子連れが集まった。参加した子どもたちは京都市内の小学1年生から6年生までの60人ほどだ。

イベントの目的は、体験を通して日本以外の国について学ぶこと。毎年、京都国際交流協会と協力して、大学や大学院で学ぶ留学生が自分たちの国を紹介するプログラムを行ってきた。今回講師となったのはベトナム、韓国、トルコ、中国からの留学生たち。子どもたちは四つのグループに分かれ、国ごとの教室を巡っていく。

講師を務める留学生たちは、まずスライドを用いて風景や言葉、料理、ファッションなど子どもたちが興味を持ちそうな分野から自己紹介。飽きさせないようにクイズなどを織り交ぜている人もいて、なかなか手慣れた様子だ。国紹介の後には、その国の子どもたちと一緒に体験した。参加した子どもたちにとっては、少し年齢が上のお兄さん、お姉さんに遊んでもらう感覚で、四つの国巡りはあっという間に終わってしまった。

教員同士がつながり国際理解教育を推進

子どもワールドフェスティバルを主催しているのは、京都市内の小学校の教員有志が集まる京都市国際教育・グローバルキッズ研究会だ。坪内昌子さんは、京都市立高雄小学校の校長で、同研究会の会長も務めている。

「研究会では教員たちが学校を超えて集まり、子どもたちの国際的な視野を広げるための授業内容や実践方法を検討しています。参加者にはJICA海外協力隊の経験者や志望者もいます。海外経験をどう授業に反映できるかといった情報交換や相談の場にもなっていて、研究会の活性化に一役買ってもらっています」

坪内さんも海外協力隊としてホンジュラスで活動した経験があり、その経験を授業などに生かしたいと思い、研究会での活動に力を入れてきた。

研究会では、JICA教師海外研修や海外協力隊に参加した教員を招いての帰国報告会に参加したり、国際理解教育の授業研究会などを行ったりし、子どもたちが世界に興味を持つきっかけづくりにも取り組んでいる。子どもワールドフェスティバルもその活動の一環だ。

「京都には観光地なので街の中には外国人の方も多いですし、市内の小学校には外国籍の子どもたちも増えています。そういう環境のおかげで、外国の人たちと共生するためのには、まず相手を「知る」ことがとても大切だと思います。さまざまな機会をとらえて、子どもたちに異文化を体験してもらいたいですし、私たちの研究会がそのきっかけを提供していきたいと思っています」

SDGsの視点も取り入れて

今後研究会では、学校教育のなかでの持続可能な開発目標(SDGs)の取り上げ方なども研究していくという。「たとえば、南アフリカは人権の面ではSDGsの目標達成率は低いですが、自然エネルギーの活用や食料自給率では達成率が高い。国ごとに異なる課題があり、日本でもまだ達成できていない目標があります。研究会では、多様な視点を持って子どもたちと接する先生たちをしっかりとサポートし、国際理解教育につなげていきます」。